



紙譜古今抄

再撰貞享式  
日字一

中村俊定文庫  
文庫 18  
206  
2





再撰貞享式

日之二

○押字と抱字の事

正しより押字（オキ）抱字（カキ）のうしと連流（リウ）に各自也  
 例として取とあるは、八月の不命のありて、○令持書  
 に押字とと云とあるは、一上とあるは、○令持書の詞  
 ありて、○の字、○の字、○の字、○の字、○の字、○の字、  
 保寧と一抱字、○の字、○の字、○の字、○の字、○の字、  
 一上は詞とあるは、○の字、○の字、○の字、○の字、○の字、  
 とあるは、○の字、○の字、○の字、○の字、○の字、○の字、  
 とあるは、○の字、○の字、○の字、○の字、○の字、○の字、





二十のゆき北をとる會し心ゆと惣各  
或を申ゆしと東と撰抄ゆしと二條に  
とみとの返りしと彼子にゆのふをこしと  
さうふ句讀ゆと押ま拍子のあまこくは不  
まじりてゆきゆんまきりて句讀のふ各  
まさんといふかく一名とせりこりし神とゆゆの  
あまもあまも大和讀癖のあまもゆゆ  
これやゆ接の常用しるむのねまも持まら  
ゆきせりゆとまとい連珠の念ぬとほくま  
ゆまのゆゆゆありし各とまらゆと詞あまもまに

其ゆの返向とありさゆと念ゆといふゆ  
ゆゆと削めゆゆとありさゆと評ゆ  
とあまもあまゆゆと古式の名と持しと  
とゆゆとゆゆと念ゆといふゆとゆゆと  
とゆゆといふゆゆといふゆとあまも  
東花云々再撰とゆゆとゆゆのゆゆ  
かゆゆと句讀とゆゆのゆゆとあまも  
ゆきせり各とありしゆゆのゆゆとゆゆ  
ゆゆと句讀の類説とありしゆゆのゆゆ  
ゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆ

といふ句をくわんてんてん人々。おれはこゝにあらざる  
 きてせら後へおれはこゝに感得たる事蹟の事有  
 してとてとまきも隠さず使はれし折らざる後  
 の百八人會してこゝに黙して讀むに於て中各  
 切めてしこまぬの各代國書あんとするが各切  
 一罪あつんてんてんてんてんてんてんてんてん  
 可各切らぬしとあつん洋とあつんてんてんてん  
 とを扱ふてんてんてんてんてんてんてんてん  
 不ふり言傳とてんてんてんてんてんてんてん  
 春秋の二部もまぬの各代國書あんとする

世各切と物各一と心切の各各とあつん  
 和歌連音れ高よとあつんてんてんてんてん  
 の各目とてんてんてんてんてんてんてん  
 して再探の大伴してまてはれしてんてん  
 ん切らぬの各各とあつんてんてんてんてん  
 して各各とあつん

咲みくも松の甲しりおれら  
 可各切 四方しりを吹くわつてんてん  
 各月のむくしてんてんてんてん  
 一各各とあつんてんてんてんてん

はつてこれの足音をまわるとかきき切ると  
ことと此の音よりわづかしくもなつてわづか  
りいむきとるて掃くはくけつるわづか  
る朝のあきらみあつたわづかにあつた  
春のつぼみの音であつたまはるの音は  
きこえてきこえておるわづかに  
にせむききききききききききき  
秘密のふききききききききききき  
一をを加ふることまけるまけるまける  
用としておるわづかにわづかにわづかに

まけるまけるまけるまけるまけるまける  
まけるまけるまけるまけるまけるまける  
まけるまけるまけるまけるまけるまける  
まけるまけるまけるまけるまけるまける  
まけるまけるまけるまけるまけるまける  
まけるまけるまけるまけるまけるまける  
まけるまけるまけるまけるまけるまける  
まけるまけるまけるまけるまけるまける  
まけるまけるまけるまけるまけるまける  
まけるまけるまけるまけるまけるまける  
まけるまけるまけるまけるまけるまける  
まけるまけるまけるまけるまけるまける

しよらしよらい△狂ましく撰まらるるおのれ  
教百章此者向あんし一言の隅とさしつねと  
さしつねとさしつねとさしつねの向に所向し字此  
奇言怪語をこれいふに入るもすぢやあかん  
今も不案のこあつて滅後と胡亂ちりおと  
柄ときとさしつねとあんちをれしつねと  
奥此おんし

田一すいおんしつねとさしつねの柳うさ  
おんしつねの柳うさ

されいし奥此おんしつねの奥此おんし

武のまおんしつねとさしつねを湖南のまおんし  
おんしつねとさしつねの柳うさ  
いしつねの奥此おんしつねの柳うさ  
つねとさしつねの柳うさ  
洛のまおんしつねとさしつねの柳うさ  
さしつねの奥此おんしつねの柳うさ  
おんしつねの柳うさ  
次しつねの奥此おんしつねの柳うさ  
しつねの奥此おんしつねの柳うさ  
しつねの奥此おんしつねの柳うさ

不裁とありしをいふは、その優劣と評し、其  
 まより、後めいせり。にち、あつらひ、あつらひ、  
 こころ、こころ、田村の、田村、田村、田村、  
 おれる、おれる、おれる、おれる、おれる、  
 の詞、おれる、おれる、おれる、おれる、  
 こころ、こころ、こころ、こころ、こころ、  
 き、き、き、き、き、き、き、き、き、き、  
 こころ、こころ、こころ、こころ、こころ、  
 こころ、こころ、こころ、こころ、こころ、  
 の新話、おれる、おれる、おれる、おれる、

海よりとていふは、素神の宮と云ふ事、  
 のあやまちあらたむと云ふ事、  
 運ニ云、後より、  
 行揚あつらひ、  
 おれる、おれる、  
 をぬき、  
 いこころ、  
 のこころ、  
 遺跡と云ふ事、  
 法格の海と云ふ事、



ふあはれし和漢よはるき北は格とまの他借  
の人北優佳多んしや例めあはれあはる  
まは二所の減な北は佳多れい也

ぬい録とく鳴りし。春のむ  
戸閉とあはれやう。みよむ  
ふとある。例し心と。ち月

左は季とらゆ。一。今北は後とらる。中  
の切をかくのこく。東と書らる。あはれ  
こま。東と木の彫り。のこことと上

下段の律白。上。中。下。北。ゆ。あ。る。ん。詞の  
あ。川。ふ。と。ま。れ。と。也

季ゆ 秋涼し。ゆ。と。は。や。な。子  
而。向。一。雪。よ。あ。ん。冬。の。雨

右二季と。子ゆあ。る。現在。の。北。子。輕。く  
あ。し。耶。も。輕。い。哉。も。さ。む。け。れ。い。あ。り。や  
端。あ。れ。い。本。式。こ。り。律。句。と。の。く。子。子。北  
ふ。用。と。ま。る。ん。ま。せ

鹿切 蚤。風。馬。の。扇。は。く。松。と。し  
鹿切 かしあ。い。松。は。ま。坂。と。馬。哉。

右之季ももに紀行ありておと駄路の巻後  
 あれは二匹一して論あり後を継子各所の  
 新しして論さるる子仲の似されともこれと  
 二匹中やのむしむれ如何とあれは木つき坂  
 あり木とはおして歩てくを継きと。爰に  
 一匹の詞と返して馬よ歩るおと馬馬と  
 爰に二匹の心と決まてなりおとの音用い  
 おとかりゆり詞一匹の心とよふいおとた  
 けい子とけいしゆまともふくも物字を  
 とも名よはるとお時ありて一

句讀切 忘れまを佐おの中。こを涼か  
 海よりく形ありあり。まよ

右之季も天和の比北作せられし例の曲節  
 あれはあててとあし。まよと我▲と授ま  
 にも句讀のまよと本式のまよ中切と物め意  
 し既らの月とやま。まよとまよ。まよとまよ  
 又味ありまよとまよ中切と例のまよ  
 して句讀と今お物まをまよとまよはれけい  
 之後と例の味との折まをまよと物別のまよ  
 総れまよとまよまよとまよ家語とまよとまよ

追善格 秋凡と折れて可なり。幸の格  
常帰よりありねと。葉の董44

右之葉と追善の御書より一とあり。松尾山院  
の武内と志とさきより一とあり。後と  
國司と九の讀より一とあり。とあり。む  
きより一とあり。格のつとあり。と  
二より一とあり。やとあり。歎息の哉  
と用ひられ。追善と格とさきより一とあり。  
まじに讀さんたこと能讀の言ふれ。これ  
句格と格より一とあり。の存せと格とさき

と七常帰と追善と訓一とあり。思郷の名お  
とあり。常帰と追善と訓對とあり。

即與解 追善はむの存せと七常帰  
むしきけ。秩父殿よりお推され

右之葉と二元の読より一とあり。切子の格と  
あり。つとあり。七常帰の御書より一とあり。  
後方のと殿の子と追善とあり。とあり。と  
の滑利とあり。とあり。追善格とあり。御書  
鮎とあり。とあり。とあり。とあり。とあり。  
とあり。とあり。とあり。とあり。とあり。

世にあらざるに或る字格の考とある也

釋中少字の考とある也

書影

はたして行格の考とある也

右三考と書影の考とある也  
選場よかれば物格の考とある也  
とある也  
の考とある也  
此書影の考とある也  
後とある也

の考とある也

の考とある也

の考とある也

の考とある也

の考とある也

の考とある也

の考とある也

の考とある也

の考とある也

の考とある也

の考とある也

可々わたくしとまじりたるに例ふゆきの端  
 と又りしきしる事、誤格とらむは後  
 白鳥の類説しけりとの事、格とあはれし例の  
 ともりと、略とていふべし。さういふ言  
 の名と對しく、名と格とありと、床のあら  
 けと、床のこま、敵とていふは、名と格と  
 けと、名と格とありと、床のあらけと、格と  
 あり、格とありと、は、格の句を、格とて、  
 名と格とありと、名と格とありと、格と

鶴屋、鳥籠の奇は、名と格とありと、  
 詩書にありと、名と格とありと、格と  
 名と格とありと、名と格とありと、格と  
 名と格とありと、名と格とありと、格と  
 名と格とありと、名と格とありと、格と  
 名と格とありと、名と格とありと、格と  
 名と格とありと、名と格とありと、格と  
 名と格とありと、名と格とありと、格と  
 名と格とありと、名と格とありと、格と

ありし物ありし物なりは各自に十の字の書は  
 論語或は二篇ありしに能くし撰取ゆると  
 ありし物と惣各とありし今此序と別各  
 とありし一説や大過玄妙と論ありしとほ  
 とありし中切とありし中切とありし中切と  
 惣各とありし今此と別各とありし一  
 され中切とありし中切と別各とありし  
 ありし中切とありし中切と別各とありし  
 ありし中切とありし中切と別各とありし  
 ありし中切とありし中切と別各とありし  
 ありし中切とありし中切と別各とありし

多岐といひありし古法の名目と持よりて  
 字名此見同しとありし中切と別各とありし  
 目とありし中切とありし中切と別各とありし  
 授よりし中切とありし中切と別各とありし  
 花名此見同しとありし中切と別各とありし  
 比ちりし中切とありし中切と別各とありし  
 たりし中切とありし中切と別各とありし  
 ありし中切とありし中切と別各とありし  
 ありし中切とありし中切と別各とありし  
 ありし中切とありし中切と別各とありし  
 ありし中切とありし中切と別各とありし

旧稿と初稿と之所の家撰あれ天和の比此  
 多福よりえ祿の遺稿よりたまりて新稿の  
 遺稿を例と之所の大任あれはたふとていふ  
 子ありて記とていふおありたりて新稿の石  
 とていふとて美玉の價とて人のこととていふ  
 及故とていふた龍とていふおありたりて  
 二幸此の例よりたりては實に我々の再思と  
 疑とていふや實に我々の慮念と悔とていふ  
 されとて所望のこと地とていふおありたりて  
 諍ひありて例とていふ實の慮念あること

の意のとらげて二幸此優劣と議とていふ  
 あらねに二幸の實評とていふこととていふ  
 實議も程ありていふ実の實とていふ

○二所のうたは事

むしりり和歌連言よか。あしふ詞の優劣あれ  
 たりて返くよ用ひ事なり。例と和訓のありとあり  
 たりて何れなりとていふことあり。○今接するは漢字の  
 字書も哉字を多用し。て稊辭と稱歎し  
 の二用とこれの俣よりなり。か。訓とて。興と

疑のちとさといひ平と哉と疑の極ととふ。か  
 かくら同じとふ訓ありとらうと哀やふも哀かふ  
 つもふのみと大和の助語として漢よと那字と  
 用もせしと咏嘆の餘韻として那字と訓と助  
 へ大和直名とと哉那の二字ちらへし和訓  
 哉と東のれら假名韻府とるりも也  
 東を云はれ所の假名韻府とえ祿七年  
 の草稿とて中丁と後出の助語辭とやう  
 せし大和の字不遠はりかまへ中丁と八義  
 の詠文といひて音詠及詠の團詞とまじ

或は空家師の假名遣ととらうし和語の  
 書代とさくさく或は又筆北哉断ととけし  
 假名直名名のくまらうとまじむはれし和語の  
 中は端とて初音と世ととらうし和語の室永  
 の筆知よとらうし和語の助語と通用し  
 新し大和詞と撰とし今此訓美いし書し歌花  
 たり▲角撰とらふに二訓の哉とちのわは書  
 のごとく東を百葉の訓美うし和語の  
 けり次音の詞ととらう詠美をとりけたりと  
 し通界の詞ありと我とされし去東のさし





心字の訓美と漢土の助語辭し名物あむ  
 何して大和より用ひなされい今これに用と  
 校とむしとらるるは神の遺稿の夜話と  
 神とむ漢文とそあはしく諸書より心字此和  
 訓と懸ひてあまねく名達の字通よりね  
 けりし説くも歌の助語のこころは漢土  
 の用とをなすとへこれと傳は傳文の訓美と  
 こまかすもさるる一と名路の本漢とあむゆり  
 けりしと形めらるると語とそさるるゆりと  
 案さる助韻ありとすていもなまきりし

和訓と移りありとアイロハレ又韻とこれと  
 大和の唱へしと心字の代はると韻の  
 あはるといされいま話して歌にあむ  
 とと詠あむの曲ありとされい盧允武の助語  
 のおる字と心字は和漢の両用と通  
 へ最字も見せし和訓の用とをなれ  
 漢文と心假音とさるるありと歌一首  
 入用ゆれ和文と心訓とからく待松の用と  
 通とさるる心字をなれし心字此和  
 通とされい心字と心訓とをなれし

梅<sup>モウ</sup>と<sup>モウ</sup>同<sup>モウ</sup>と此音とま<sup>マ</sup>を<sup>メ</sup>はら<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>知<sup>チ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>南<sup>ミナミ</sup>  
 こ<sup>コ</sup>も<sup>モ</sup>ち<sup>チ</sup>り<sup>リ</sup>と<sup>ト</sup>し<sup>シ</sup>た<sup>タ</sup>れ<sup>レ</sup>て<sup>テ</sup>唐<sup>カラ</sup>音<sup>ネ</sup>よ<sup>ヨ</sup>め<sup>メ</sup>れ<sup>レ</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>  
 そ<sup>ソ</sup>い<sup>イ</sup>て<sup>テ</sup>と<sup>ト</sup>ま<sup>マ</sup>く<sup>ク</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>平<sup>ヘイ</sup>此<sup>コノ</sup>書<sup>カキ</sup>の<sup>ノ</sup>り<sup>リ</sup>の<sup>ノ</sup>  
 とも<sup>トモ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>や<sup>ヤ</sup>く<sup>ク</sup>け<sup>ケ</sup>各<sup>カク</sup>都<sup>ツ</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>和<sup>ワ</sup>  
 直<sup>チキ</sup>名<sup>ナ</sup>の<sup>ノ</sup>二<sup>ニ</sup>体<sup>テイ</sup>と<sup>ト</sup>ま<sup>マ</sup>く<sup>ク</sup>一<sup>イツ</sup>漢<sup>カン</sup>文<sup>ブン</sup>の<sup>ノ</sup>跡<sup>セキ</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>  
 け<sup>ケ</sup>し<sup>シ</sup>侍<sup>シ</sup>哉<sup>カ</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>古<sup>コ</sup>抄<sup>セウ</sup>の<sup>ノ</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>我<sup>ガ</sup>ら<sup>ラ</sup>我<sup>ガ</sup>の<sup>ノ</sup>お<sup>オ</sup>  
 ら<sup>ラ</sup>ん<sup>ン</sup>な<sup>ナ</sup>れ<sup>レ</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>の<sup>ノ</sup>こ<sup>コ</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>  
 の<sup>ノ</sup>を<sup>ヲ</sup>同<sup>ドウ</sup>く<sup>ク</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>  
 の<sup>ノ</sup>向<sup>ムカ</sup>く<sup>ク</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>  
 こ<sup>コ</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>

み<sup>ミ</sup>ら<sup>ラ</sup>く<sup>ク</sup>。我<sup>ガ</sup>の<sup>ノ</sup>お<sup>オ</sup>ら<sup>ラ</sup>ん<sup>ン</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>  
 和<sup>ワ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>  
 曲<sup>キョク</sup>の<sup>ノ</sup>詞<sup>ジ</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>  
 東<sup>トウ</sup>老<sup>ロウ</sup>云<sup>クニ</sup>例<sup>レイ</sup>の<sup>ノ</sup>な<sup>ナ</sup>ま<sup>マ</sup>ら<sup>ラ</sup>ん<sup>ン</sup>浮<sup>ウ</sup>哉<sup>カ</sup>の<sup>ノ</sup>よ<sup>ヨ</sup>う<sup>ウ</sup>各<sup>カク</sup>向<sup>ムカ</sup>の<sup>ノ</sup>多<sup>タ</sup>岐<sup>キ</sup>  
 と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>  
 と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>  
 何<sup>ナニ</sup>も<sup>モ</sup>い<sup>イ</sup>け<sup>ケ</sup>ら<sup>ラ</sup>ふ<sup>フ</sup>曲<sup>キョク</sup>の<sup>ノ</sup>詞<sup>ジ</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>  
 昔<sup>カク</sup>近<sup>キン</sup>く<sup>ク</sup>梅<sup>ウメ</sup>の<sup>ノ</sup>中<sup>ナカ</sup>の<sup>ノ</sup>詞<sup>ジ</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>  
 今<sup>イマ</sup>の<sup>ノ</sup>我<sup>ガ</sup>ら<sup>ラ</sup>我<sup>ガ</sup>の<sup>ノ</sup>お<sup>オ</sup>ら<sup>ラ</sup>ん<sup>ン</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>  
 これ<sup>コレ</sup>い<sup>イ</sup>け<sup>ケ</sup>ら<sup>ラ</sup>ふ<sup>フ</sup>の<sup>ノ</sup>用<sup>ヨウ</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>

けし和音此艶詞とかな付ふれを所余の  
 鑑といつむよのほれ能治の詞より大子とい  
 本換つらんらん今此書近より詞の言葉  
 那の歌ありとやあしるか歌とて和音の  
 振子せねと起括の解しめあつたれあ  
 郷音とてふくまやむいなるあのを解す  
 風此方と行一殊とゆる哉 あまの  
 こころ句とあり集此設論の例の比都と題  
 とけとそとらる。我も。却しくは名取よ名取  
 とかたわつたれ改定のはきこつてまや能子

此あすり短うたえ物うらもはよ所 △程抄  
 つけ我とそあ我とを浮してあむとて我と  
 所て節とつけあは源太の初書とてあま  
 して軽くとらと反書うてあしる。我と  
 ついて。却と不遺抄の二用とてまらませ  
 きとて連絶の比式と色くの各目あるは和原  
 の通角あむるを公書のはきこつて用ひか  
 或は右式の各目と願我とてあれと源太  
 へ決しを此字まあまらつた初め各目とあ  
 手字の初類とてまらや右今に色くの各目

あれこれいふをいふはさうと称歎の枝葉をいふ  
例の多岐といふはさうと

○いふはさうと

古おららやめをいふはさうと止らるゝいふの各目あれと  
例の和漢と通同といふはさうといふはさうといふはさう  
懸耶と称歎哉といふ合也といふはさうといふはさう  
古おららやめをいふはさうといふはさうといふはさう  
の論をいふはさうといふはさうといふはさうといふはさう  
やの子はさうといふはさうといふはさうといふはさう

称歎哉といふはさうといふはさうといふはさうといふはさう  
彼より各々といふはさうといふはさうといふはさうといふはさう  
むさくやといふはさうといふはさうといふはさうといふはさう  
ありこれといふはさうといふはさうといふはさうといふはさう  
といふはさうといふはさうといふはさうといふはさう  
韻會のその言之間ありといふはさうといふはさうといふはさう  
のこころといふはさうといふはさうといふはさうといふはさう  
也字といふはさうといふはさうといふはさうといふはさう  
喜而や秋月やといふはさうといふはさうといふはさうといふはさう  
るといふはさうといふはさうといふはさうといふはさう

古式の常法や○今梅もるに歎と平此二子と  
 今もやの字此却おより歌を古く平の解  
 傳文と云ひく平と用ひて後か疑の詞あり  
 傳れり返ると舞ありとるると歌書のように也で  
 返ると舞といはむとやん何なるや例のまゝ歌と  
 ありと返れた切字の用と傳さるはと疑ふと  
 論より及ぶと傳く例の切字よりして也といふと  
 まつとも也○獨梅もるに古おのり了頓哉と子  
 ともちりて他家の名教とあるへ頓平と子  
 へまもや傳説とあれは。と後とあれは。と傳り  
 へ

あの子も。にせまも大和の助語あり真各よ平那  
 と傳り和止とはとて二詞とに頓ひめとあるん  
 と切字よりかつてたの字もあはむはれは。これの  
 今梅と古式の各目とありとられ二世の家議と  
 家へく百世の而益とまらへる也○梅もる梅  
 と助語の平よと世の。に字の助ありとさりと連ね  
 の両方よとに現在事まわと切字より過去の切字  
 とありともやたれと。今。此口傳ありと。昔。い  
 り。傳。ま。い。歌。ま。い。と。い。と。傳。あ。と。切。ま。と。あ。ん。  
 と。い。か。へ。と。も。と。い。と。傳。あ。と。切。ま。と。あ。ん。  
 と。い。か。へ。と。も。と。い。と。傳。あ。と。切。ま。と。あ。ん。



い音約の事いふらんといふ一書は字此の言と  
よ一△角撰とらん我々の字なるは假名を  
先く一真名と後く一假名のみより真名と  
そのいふれは昔時と特識の字早なるはゆめめな  
る事ありてありてはよ業事此社人知の事  
新政の哀世の事いふ事端と真名よ一画を  
よりなるはゆ一こと一事一の事いふ事いふ  
の事来りて歎きとて濁るといふはゆめめなるは假名  
いふをゆめめと一と一と一と真名の事いふ事と見止  
同止とて不見不聞とていふ事。此の事いふ事也

或とてんまじと濁りたるも或とてんまじと濁り  
あま一假名あれたるはけの事とて真名は見えぬ  
とてい見<sup>ニシ</sup>止とてい見とて不見とていふ事  
ゆめめと後字の法<sup>イリ</sup>濁りて天台と天様の事  
とやあれたるの訛も拙号は此の法あれたる我々の  
法<sup>イリ</sup>濁りて伊呂波の字中の子あらずは此の濁り  
る中あれたる事といふ和音所の事此の事と和音  
連なりて濁りてゆめめとて我々の法とて事此の事  
とやゆめめとて用とていふは濁りてゆめめとて  
事此の事いふ事いふ事濁りてゆめめとて事此の事



他語の増しはらひ△程撰よりんも来の。此字  
 の駢集と云ふる東坡の益替に極おの事  
 してはゆく。書ん哉とてに切字の如くあり  
 ありやうあしとてし付とくの類とく今之の  
 なる所の。夏議とらゆへも若女坊より  
 て天女の眞人合しあひあふとてしに海  
 けり一語を天下此ら式し用ひまねりも来此  
 一。さのて切字とて過去のもの。さのて切字  
 とあをれい知。此口付し付し用とありいり  
 一部のを駢あんとらららし口ひの字儀より

しるしとらねの支配とまのしるしと

或は大和の助語の中に和漢の通用と云ふれい  
 換字此らしるしとあも一字換りも話の日用  
 として直名とて実字と用へく二子換り和音  
 の優言として正字と用へくはるに和音の  
 抄物よりまゝ家のやうやくんとな別のむれ  
 ちるんととてしらら。やの子此る可と端  
 ちり他語の字誤し二子換りあひあねやの子  
 まるなりしうものまて方あし。○今換り  
 換字のさしむとて字より海へとらむと

ちりら何れもいふべし。又さうと大和の助語  
取らまふら。またあらしも取らまふ。起るら  
し。しるい。や。未味の詞をいふ例のも名仲とせね  
る。ふり。きり。むり。る。の。お。ま。て。ら。し。む。い。と。の  
疑辭とせねる。あしん助語とせねる。い。和漢  
の例あり。或ら。と。ま。い。字。し。及。り。例。の。辨  
し。論語の正字とせねる。緩詞とせねる。也  
と。い。れ。和。訓。の。款。文。と。き。と。い。千。言。万。語。ち。り  
ら。ふ。ら。む。の。例。と。り。公。義。の。訓。と。あ。る。ま。い。せ  
蓮ニ云はるる連流よゆる遠流のよと云ふ事也

節用し。て。和。訓。の。助。字。お。も。あ。り。と。あ。れ。後。者  
と。和。訓。と。通。用。し。て。平。語。の。用。と。せ。る。也  
い。實。承。の。ま。お。し。ら。る。れ。と。和。訓。と。せ。る  
ら。あ。し。と。い。ふ。は。お。と。な。り。助。語。の。例。の  
よ。か。ら。い。と。假。名。と。い。ふ。は。あ。ら。ま。い。と。い。ふ。と。い。ふ  
直。名。と。い。ふ。は。あ。ら。ま。い。と。い。ふ。は。あ。ら。ま。い。と。い。ふ  
の。通。用。と。い。ふ。は。あ。ら。ま。い。と。い。ふ。は。あ。ら。ま。い。と。い。ふ  
お。し。和。漢。の。用。あり。て。始。と。哉。字。の。二。用。と。あ。ら。る  
と。哉。と。ち。り。手。と。訓。し。助。語。と。せ。る。と。い。ふ。手。那  
と。い。ひ。助。語。と。あ。ら。ま。い。と。い。ふ。哉。と。訓。と。い。ふ。と。い。ふ。假。名

の通韻あれは本亦しとの同しふ訓ありて  
 とちしと小註の詞ありし稱るるし歎美の是あ  
 りしとせむも一名とさあつて我にけしむの  
 微中と信まじりぬと耶と世のよむに  
 ちし漢字の音多かり大和のそと音治し  
 て系もつらふ事ありし餘りて録しは佳利  
 砂鉢もしおせぬと年と歎の種言たり歎を  
 のほろよ讀くをと種おはらるる能信のそと  
 也とちし名にけしむ梅に書しはたけし手  
 歎の字美ありてと類思くしむるにけし手

といふ儒書に點名の博愛とある梅し  
 君し何の博しあるにたし詞のあやふ  
 りといふる一詞よ。北野園と我書北  
 羨といふあはれはしと耳となすとい  
 用花と家ゆとあらん梅とあはし。たまの助  
 讀るる君。といふ。いふ何のあはれと  
 けしむとそと和訓の神秘といふ讀の助音  
 も大和の助訓も言語不到のるにありし  
 り本の人た果しとちし漢字の助読辭と後  
 とむとちし取しと取しと推考ありしと

聖字の優言一々和訓の助語とてなれ  
るると一詞十知の凡例として八義の款とい  
ふに却破は一誠や詞の急緩とまを  
唯乃とて婦と前とてそへてはなれ  
る一てなれは緩ちり天の常格と  
よまひは他格の例の傍を平詠とて貴感と  
の凡用なり士農工商の凡用なり下字の  
凡用とてその凡用を知るべし

○一百韻の表の句の事

當時の百韻とて一々連記の中に在れば  
上と下と下句と下句と種と種と一々  
なれと連記の上は格と下は格との  
一々一美の式と後の凡用なりと  
連記の本式とて一々一々一々の表  
の表とて一々一々一々の表とて一  
々一々の表と連記の上は格と下は格との  
一々一々の表と連記の上は格と下は格との  
一々一々の表と連記の上は格と下は格との  
一々一々の表と連記の上は格と下は格との

八句の角より神祇類教意が常平各所人各々  
 増やうへ者句服身之中より二巻の積方と成  
 ちよ下のあむらむ降しく袖折と所おやうの  
 一月をちら目まきとねとほとまう一はれと  
 清衣と  
 といに物いふおれと神祇下此各同とま  
 けらと二巻の曲意とまうとらうとらうと  
 百約の表は向うとらうとねと者向と混注の  
 間を  
 左極の二氣此物とあれと陽の深とれと  
 されとたれとそとれ差ふのちとたに  
 なる白とら  
 抄子のほほあらしと一は格とらとと起とら

八句と服とらやと一万物と一ははれり  
 一は對とれ  
 といとちりも二と混一の深格とらと  
 一はとと  
 け傷の和をくといとたよりを位一  
 一とを位  
 の傷らるとまうと一ははれ服の物字  
 くとなる句  
 せ其のまらふとあやうと調のま  
 くとあふとあふと  
 さらると二と子れ意向とらと  
 くらとま  
 けとあれと物字とらと  
 例の名目也は格とら  
 是と室とらと或と兼字と用一  
 引取とせと  
 たらとらとらと万物と生とらと  
 たら運とまら  
 たらとらとらと一節とらと一  
 者句の深とらとまらとらと



まゝ変化の用なれど五音とす一五音あり

○四折一五音地此事

此は五音の序なりと云ふは折の面より折  
より五音と表あり而して今我の心所と  
なりけむしと云ふは折と云ふなりと云ふ  
より五音と云ふなり而してあり表と云ふは三用  
と云ふなりは折の配なりと云ふは折の表化  
なりと云ふは曲なり地のことなりと云ふは  
名なりと云ふは今様の訓物なり地と云ふ

節と云ふは曲なりと云ふは表ありと云ふは  
宗訓の西なりと云ふは表ありと云ふは  
詞なりと云ふは詞の表ありと云ふは  
句作と云ふは句作の表ありと云ふは  
表ありと云ふは表ありと云ふは  
はげまの表ありと云ふは表ありと云ふは  
はげまの表ありと云ふは表ありと云ふは  
はげまの表ありと云ふは表ありと云ふは  
はげまの表ありと云ふは表ありと云ふは  
はげまの表ありと云ふは表ありと云ふは  
はげまの表ありと云ふは表ありと云ふは  
はげまの表ありと云ふは表ありと云ふは

ことよむらむに折るるに折のくまらると折折を  
 きた地とをこつかりしとき言経語と承と尚句  
 七折んじまあゆらりし一こまむむたれと書れ  
 七句同し月とりの重ぬの句同し月秋とこり  
 十句同し月と花れとれに折折と月花の儀亦  
 おぬくされと世はのれ節ちりたりと世と能得の地と  
 いなりまされに折よつりしと地とあゆの折お  
 とくそりし折折の心とあひし一ととれ用  
 知つりし世はのまらむとけしつらし折と  
 けりしこと能得のまらむとけしつらし折と

一と言語をこつかりし時の妻あんなのややあは  
 歌よあはと能得と事語のすゆまむちらりと  
 中なりし能得の心とぬとこりしと大罪の人  
 の趣向とあむしまや節らふ事よめと月とあは  
 いら言をこつかりし折の妻あんなのややあは  
 例の不問のまらむとけしつらし折の儀もと希有  
 の趣向とあむしまや節らふ事よめと月とあは  
 いら言をこつかりし折の妻あんなのややあは  
 例の不問のまらむとけしつらし折の儀もと希有  
 の趣向とあむしまや節らふ事よめと月とあは  
 いら言をこつかりし折の妻あんなのややあは



はくまうーはかき和をり和まねとれとてあま  
 とりる在人の控とまゐるうもきりてふらあ  
 中の人と優游自在の人とてあまかくて合縁の一  
 折とていふる約のそ尾あれたるまおれは連  
 とくくいいてちひせりあふ人とあまなまこと  
 二所の詠くついで世にの可合とていふくあま  
 二妻の二つを句花と奉句とていふるあま  
 清まれのちひとてあまのあまといふくあま  
 二所まあまといふあまといふくあまといふく  
 疎句とていふのそ尾とていふくあまといふく  
 言程

のあまいしてゐるま世にとまねる人といふくあま  
 いあまの用うて次中とていふくあまといふくあま  
 のそまらたてあまといふくあまといふくあま  
 とあまといふくあまといふくあまといふくあま  
 あまといふくあまといふくあまといふくあま  
 うて例の継接自在ちりりーあまといふくあま  
 互射八教も竹林の園とていふくあまといふくあま  
 のあまといふくあまといふくあまといふくあま  
 剛詩正書とていふくあまといふくあまといふくあま  
 とあまといふくあまといふくあまといふくあま

まろくをくまらぬとてあましくあつとまらぬに耳  
と知らるる一とていふは能得の煩悩なる  
法とまらるるをいふは儒術の温知なる  
宗をいふは儒術の教化なるとて  
句作の書を用ふとて世に人句の書を用ふ  
まらるる能得とていふは人句の書を用ふ  
とていふは儒術の教化なるとて  
の文とて用ふとていふは儒術の教化なる  
あらはるるをいふは儒術の教化なる  
くまらぬとていふは儒術の教化なる

まらるる能得とていふは儒術の教化なる  
あらはるるをいふは儒術の教化なる  
くまらぬとていふは儒術の教化なる  
の文とて用ふとていふは儒術の教化なる  
あらはるるをいふは儒術の教化なる  
くまらぬとていふは儒術の教化なる

られたけいふ二宗とまき孫の御句とていふ  
てはよとあはくはらふの句あれこれと引句  
の例とまらふとせしむ程撰まらじけは撰集  
の集むとて漢家の百千万とて我あめ  
正一代伊東と撰者といひたり物なりとて  
まのと鼓舞の役なりて選場の大臣と  
そのもせけぬよ白馬の詠笑訓よ國其名馳鞠  
のあまふとていふもいふは他所の所合とて  
おひ業あれとて暇中と撰集たては業と  
誦て却てとてやこりてはけいふとありて

藤抹とや後の人といふとていふに  
おとれとあはくはらふとて撰集とて  
ちる

○月花北事

月花といはれぬとていふとていふに  
の花といふとていふとていふとていふとて  
月花といはれぬとていふとていふとていふとて  
せりと宗祇の比と軒許ありて月花七月北事  
とていふとていふとていふとていふとて  
中とていふとていふとていふとていふとて

詞とありて世にの舞美と謂ふまはの梅も  
 二月とありともまの艶美といひ秋の月冷と  
 之れは月むらきく各月より物と陽のお對  
 としよまはちとく古式めら花語とて花に  
 いろくのおありく或は花物といふはらり  
 或は花物ありともいふ或は舞とふはれと  
 十色と十品といふはかく百世の詩とまは  
 へうとまはしつて花とつて物とつても花と  
 艶美の舞は各よりし木と竹の名といはくぬ  
 ひまよありともいふ花あり花物ありともいふ

花ありとれは花舞花物のおもひもいふと詞の  
 何あり花よきともいふまは花中草の名と  
 たりて信句辨といふまはなるといふまは花  
 のまはつらひく月と舞とも天象といはれたの  
 且説とありまはちやん月と舞の月と例と新  
 こふまはちや月むらと舞まはちやんまはち花  
 とつらまはち月と舞の舞まはち秋らりまはち  
 舞一或は花やち花く一の詞と新式といはれ  
 ありまはち右おし胡亂の例はありまはち此編  
 ありまはち或は茶の茶舞といふ詞と茶花

のはくまにむしりてく連船のふりちあふり  
 へん能清ふはまきりてゆり鼻我島はの  
 むと清てこの用とあててててててて  
 へんてれと書けの用てて用とてお字のへ  
 へんてれはててててててててててて  
 へんてあやあてててててててててて  
 へんて二端へ接のてててててててて  
 接のてあててててててててててて  
 接のててててててててててててて  
 のてててててててててててててて

決ててててててててててててて  
 大論ふててての裏評とてててて  
 へかくててててててててててて  
 のててててててててててててて  
 同ててててててててててててて  
 とててててててててててててて  
 のててててててててててててて  
 ててててててててててててて  
 ててててててててててててて  
 ててててててててててててて  
 ててててててててててててて  
 ててててててててててててて  
 ててててててててててててて

けねし百韻を花のたのむ所をいふ月と月秋と  
ありし一執事より月秋とす所をいふ月秋と  
よりとありて月を為月とありし一下の月  
の接ねより一中央と百韻の連ねより一旬  
月秋とあはれいなるを花の秋とあはれい  
る所を七月の月とあはれい花の秋と一旬ありて  
秋とあはれいにさくさくせん事なるの配か  
ありしはあはれと月秋とあはれい一旬の秋と  
あはれいなるを花の秋とあはれいなるを  
いふは二花二月とあはれいなるを連ねて  
あはれいなる

と名残の月とせりしきれいと執事の例にあはれいなる  
の例はしもあるやうにさくさくせん事なるの配か  
ありしはあはれと月秋とあはれい一旬の秋と  
あはれいなるを花の秋とあはれいなるを  
いふは二花二月とあはれいなるを連ねて  
あはれいなる  
と名残の月とせりしきれいと執事の例にあはれいなる  
の例はしもあるやうにさくさくせん事なるの配か  
ありしはあはれと月秋とあはれい一旬の秋と  
あはれいなるを花の秋とあはれいなるを  
いふは二花二月とあはれいなるを連ねて  
あはれいなる

と月花の公武とてりて、花よ新門の大論りり  
 月よ新門の新規りりなるの儀ねし軍卒  
 うして世をてにま用を捨らりと遠く  
 らとあやしく近く梅と露あらし住化のたふ  
 へまかろんはらと我まの双牙とあら  
 下風虎の威とかりて軍卒とあらんはま  
 へ賞法の神とせられ花ねと接舌の罪と  
 かふしんはらとてかろんてまかむは武の  
 再撰りり  
 ○ 拾ふま嫌也事

古武と拾ふま嫌とふとてりて各月の言ふら  
 ぬとれと拾ふとてりては名徳とていふ嫌とてり  
 原物のぬあらんまこれと名を用いてはらと武の  
 服とてりての言あるとて○今将とらに守は  
 亦月とてぬわは御軍とてりて連をよみ只と  
 ある物と誹語とて青訓とてりててりてりてり  
 連とてりて家の制とてりてとてりてりてりてり  
 へに誹語の拾はらぬとてりてりてりてりてり  
 へら船の艶詞とてりてりてりの中は以れはとてり  
 他語とてりてりてりの中は以れはと

古今抄卷三

三七

あつらふとらふと仰せの大小女ありしと云ふと一  
 りあふとく一ゆりこことくしれつ仰せありあは  
 いらむ折とらの優遊とてあつて朝の御方と  
 をあれんるせうしつと仰せを聴く一とては家  
 の用あんと連言ととらふの家とてあつて能言の  
 士氏の心とやうけつて言はずは能言のききしと  
 あつち一連言と一はとらふとあつち一何れ連言の  
 ちふあるとむむと二つめの差ふとと連言  
 の人せう一つらとせざるは能言の用あつて信信  
 せざる一ととらふと一信言と一とむむと

まじりの鬼と尾公の式と鬼を千句と一と尾公  
 の百物と一と一とあせとらふと能言のあつちと  
 信信の平話の用あつち信言のあつちとあつち  
 ちりきと一と一と一とあつちと鬼と一とあつち  
 と一と虎尾鬼都のまけつち鬼信言のあつちと  
 信信と一と一と一とあつちとあつちとあつちと  
 朝のあつちと一と鬼虎のあつちとあつちとあつちと  
 能言のあつちと一とあつちとあつちとあつちと  
 のあつちとあつちと一とあつちとあつちと  
 と一とあつちと一とあつちとあつちとあつちと



人鬼の虎のしんかのやうに申すに申すに申すに申すに  
 ともなれども思へば思へば思へば思へば思へば思へば  
 の笑料あつんかくら連飛のちんあれと連飛の  
 こととしく能飛のひととしくとしくとしくとしくとしく  
 御の二つにはとしくとしくとしくとしくとしくとしく  
 の能事と指合とを嫌としくとしくとしくとしくとしくとしく  
 としく自故自棄此は法としくとしくとしくとしくとしくとしく  
 第一としくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしく  
 世はちりあると信としくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしく  
 とめら私事ととしくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしく

向くは名を能の指合としくとしくとしくとしくとしくとしく  
 七つ向と申す打教としくとしくとしくとしくとしくとしく  
 おととしくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしく  
 としくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしく  
 ひと向の向としくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしく  
 ちとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしく  
 としくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしく  
 としくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしく  
 のあまにああれたたしくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしく  
 おあし指合としくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしくとしく

くはらたしんかいたまはりちやとてんか一向けり  
めいひもあつゝんまに指きの部いりやあぢま  
とよもつちまもた直をまふりて一字あはれ  
いすのまふふもくせりてあやひれをを記の  
凡例をよるん一かきまあひりて違ひに直の  
書とまよふてあまのいりてくくあはれ  
に直しつらひつらひて後路の指きの有る  
かひらたしんかいたまはりちやとてんか一向けり  
いひひもあつゝんまに指きの部いりやあぢま  
とよもつちまもた直をまふりて一字あはれ  
いすのまふふもくせりてあやひれをを記の  
凡例をよるん一かきまあひりて違ひに直の  
書とまよふてあまのいりてくくあはれ  
に直しつらひつらひて後路の指きの有る  
かひらたしんかいたまはりちやとてんか一向けり

ひくひんかいつら月くとちりていりていりて  
かあひも直各あはれいりていりていりて  
よもつちまもた直をまふりて一字あはれ  
いすのまふふもくせりてあやひれをを記の  
凡例をよるん一かきまあひりて違ひに直の  
書とまよふてあまのいりてくくあはれ  
に直しつらひつらひて後路の指きの有る  
かひらたしんかいたまはりちやとてんか一向けり  
いひひもあつゝんまに指きの部いりやあぢま  
とよもつちまもた直をまふりて一字あはれ  
いすのまふふもくせりてあやひれをを記の  
凡例をよるん一かきまあひりて違ひに直の  
書とまよふてあまのいりてくくあはれ  
に直しつらひつらひて後路の指きの有る  
かひらたしんかいたまはりちやとてんか一向けり

とくまうくもくわんくは兼のち紙の海はあめりか  
くまうくもくわんくは兼のち紙の海はあめりか  
くまうくもくわんくは兼のち紙の海はあめりか  
くまうくもくわんくは兼のち紙の海はあめりか  
くまうくもくわんくは兼のち紙の海はあめりか  
くまうくもくわんくは兼のち紙の海はあめりか  
くまうくもくわんくは兼のち紙の海はあめりか  
くまうくもくわんくは兼のち紙の海はあめりか  
くまうくもくわんくは兼のち紙の海はあめりか  
くまうくもくわんくは兼のち紙の海はあめりか

さる物あり家々地々といふはもくわんくは兼のち紙の海はあめりか  
さる物あり家々地々といふはもくわんくは兼のち紙の海はあめりか  
さる物あり家々地々といふはもくわんくは兼のち紙の海はあめりか  
さる物あり家々地々といふはもくわんくは兼のち紙の海はあめりか  
さる物あり家々地々といふはもくわんくは兼のち紙の海はあめりか  
さる物あり家々地々といふはもくわんくは兼のち紙の海はあめりか  
さる物あり家々地々といふはもくわんくは兼のち紙の海はあめりか  
さる物あり家々地々といふはもくわんくは兼のち紙の海はあめりか  
さる物あり家々地々といふはもくわんくは兼のち紙の海はあめりか  
さる物あり家々地々といふはもくわんくは兼のち紙の海はあめりか

暗くぬき禱言とまゝにばけり能はるる  
 所ら集の祈禱と牛とりのいふかゝるる  
 ち一はて又ら可のこゝとていふ  
 事いふらんちなるるは  
 とやと人の公衆とまゝに  
 の指合とつらまや  
 つまらぬるもせぬと  
 のあはれは  
 むれい  
 りの祈  
 誦言

刺さるるやは  
 とのいふ  
 せんや  
 別るら  
 らせ  
 こた  
 指合

東を云今ら  
 の西式

の語抄し詳をわしきまへにふらふとあけり  
 之余と例の百通と一もせられたる能活の  
 本と本より連なりと深とせられたる能活  
 の新本と極むの二書とまゝにふらふ能活と  
 中から能活し用換のまゝとあはせむと  
 例のあはせたりとまゝに連なりと式の二書  
 あれせりといふとふらふ新古とあはせり  
 一約字なり △撰云約字のほほに能活しけし遠  
 せんはてし約甚とあらむ所よりいふ名あり  
 一輪廻なり △撰云能活しる所合の中盤とあはせり

一と句の字とてけりたる能活とせらるる  
 一並のふなはしり言と句にたひらりたる  
 所合の掃廻なり 一若し句より書しり作し  
 たりとあはせりと連綴の句よりあはせり  
 能活し同しり自らまゝに能活の掃廻とあ  
 はせられたる善法よりあはせり 一たははは  
 しあはせり折とあはせり  
 一本歌なり △撰云能活しり歌より能活あはせ  
 り能活しり能活しり能活しり能活しり能活しり  
 と所合しり能活しり能活しり能活しり能活しり

まゝおほいせしあつて子可ありてありてなり右語  
 のあひらりらとてし字とかりし各とかりしこと  
 かぞゑしとて又し採摘の常法なり也船語を  
 いし事語のあはらぬれつと摘之語を採ん  
 んといふあはらぬれつとたえさくちんといふ  
 もろとあはらぬれつとたえさくちんといふ  
 右語を用ゆらるるも語とかりし事とあはらぬれつと  
 船語と事語のこたまりなり  
 一新物群用す  $\Delta$ 撰云うらうらとくひあひらき撰  
 んてもし一様し船語とあはらぬれつと用ふとあら

群用の説とらゆらるる家と地と川と橋とといふ  
 ゝ二可しやらるる一十二所とてはもとめて群用  
 あれしとあはらぬれつとあらぬ也  
 一此百物す  $\Delta$ 撰云前求にその鬼屋のおれ也  
 ちるると守若此能或るらる録しあらぬし音訓  
 かりとて各谷とらるると連て此とてしとあら  
 と論まれの事各同群  $\Delta$ 一てし子とらるる類  
 今此能語の語とて同名異群の差ふとて  
 てしとてしねとらるる事とてしと思はれ  
 鬼屋といふてし  $\Delta$ 一て牛頭馬頭のあはらぬ

古今抄

四一四



五七〇七の條は古今と云ふて一  
 向ありし。△撰ははら連牙北或向の法種意  
 の又向ありては是をさへは向ありし。能後例の  
 用持ては向ありしと云ふては、あまの府  
 の交しむもは向ありしと云ふては、  
 のあまの府よりては連牙の豊田と云ふ  
 のさへは向ありしと云ふては、  
 のさへは向ありしと云ふては、  
 のさへは向ありしと云ふては、  
 のさへは向ありしと云ふては、  
 のさへは向ありしと云ふては、  
 のさへは向ありしと云ふては、  
 のさへは向ありしと云ふては、

ちよ七箇條の標むと志守の新式より七  
 條の年とくらりては、さへは向ありしと云ふ  
 へは向ありしと云ふては、  
 のさへは向ありしと云ふては、  
 のさへは向ありしと云ふては、  
 のさへは向ありしと云ふては、  
 のさへは向ありしと云ふては、  
 のさへは向ありしと云ふては、  
 のさへは向ありしと云ふては、  
 のさへは向ありしと云ふては、  
 のさへは向ありしと云ふては、



する所を一一に記すに於て終つても能く例の  
 世法に於ては指合を嫌とせしむる事あり  
 五七の能く書と書とを命と命とを席と  
 座とを座とを命と命とを座とを座と  
 のは座とを命と命とを座とを座と  
 なる所を記すに於て用と命とを命と  
 の宗近遠も連なり此等と繼つてなる一  
 連なり此等と命と命とを座とを座と  
 とし能く書とを命と命とを座とを座と

貞吉来りて二終

